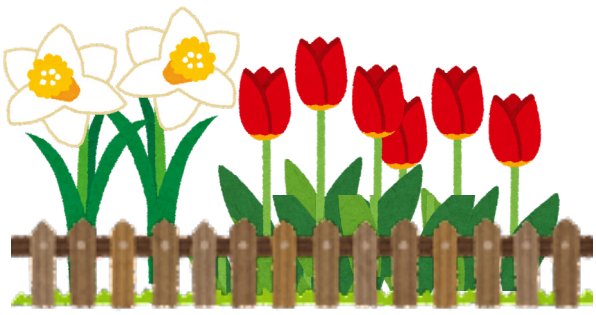
クラスターを経験して

看護部長　児玉　千恵美

今年の冬は新型コロナに加えロシア軍のウクライナ侵攻のニュースが絶えず、ひときわ虚しさや寒さで心が冷え込むことになりました。戦争も新型コロナも終わりが見えない状況です。新型コロナには全職員が緊張感をもって対応しておりましたが、残念なことに病棟で複数回クラスターが発生しました。病棟で患者様の一人が発症した時には、すでに患者、職員の複数が感染している状態でした。患者様は数日間部屋から出ることができず、濃厚接触者と判断された患者様にも隔離が必要となりました。感染者の病室には職員が出入りするたびに感染防護具着用のための時間を要し、ナースコール対応でお待たせする事が度々ありました。リハビリをして自宅退院を目指す方、手術予定の方や治療中の方、多くの患者様やご家族に不安やストレスをおかけすることになりました。患者様には、度々の部屋移動など感染拡大防止にご理解とご協力をいただき感謝しています。

初回のクラスター発生時は、患者様だけでなく多くの職員が感染したため、他病棟や他職種の支援を受け、３週間ほどで終息することができました。２回目は感染もあまり広がらず２週間ほどで終息しました。職員の感染者には後遺症に悩まされ長く苦しんだものもいて、新型コロナの感染力、怖さを身近に感じることになりました。クラスター発生時には、医師や多職種で構成されている感染対策チームがいち早く病棟と連携し対応しました。患者様の入院時には直前に感染検査を受けていただいているのですが、それをすり抜けて翌日から３日後に発症されるケースがしばしばありました。現在の新型コロナウイルスは極めて感染力が強く、一次発生を防ぐことは困難ですが、陽性判明後、感染対策チームの指揮の下、医師や病棟職員が直ちに適切な対策を行う、この連携の速さで感染拡大を防ぐことができたと思います。そして患者様やご家族の方々が面会制限など、協力していただいたことも感染予防対策の大きな助けとなりました。

また、新型コロナや戦争が引き起こしている物資不足や燃料などの高騰の影響は、病院も例外ではありません。病院は、診療、療養環境に必要なものは欠くことができません。医療用資材、薬、検査キットなどの手配にも苦慮しておりました。どこの病院も同じ悩みを持つ中、これからどんな問題が引き起こされるのかわかりませんが、職員間、地域の施設間の連携を深め、支え合い、良い医療を提供できるよう努めてまいりたいと思います。